



7月からスタートした全魚の常設展示。1階のエントランスホールに円形型の水槽が10ほど配置されている

太陽光を採り入れた水族館

上山 館長は「アクアマリンふくしま」(以下、「アクアマリン」と略)の計画段階から関わってこられたとのことですが、ここの特徴をお聞かせください。

安部 私は東京都葛西臨海水族園も計画段階から携わっています。オープン(1989年)当時、ハコモノではない、なにか飛躍したものが作れないかという意見があり、既存の技術から将来の展望をひらくようなものを探し出さなければなりません。水族館の完成まで少なくとも7年はかかります。しかし、7年後にどのような技術革新があるかは把握できません。

葛西の竣工後に、アクアマリンの計画が出てきました。次世代の水族館はどのようなものがテーマだったと思います。葛西もそうでしたが、設計候補者選定委員会を設置した。これは建築だけではなく、クライアントが展示のシナリオを出し、それに具体的な絵を描く作業も含めたコンペでした。

上山 ハードだけでなくソフトのコンセプト作りもコンペの対象に含まれていたわけですね。

安部 選ばれたのは日本設計で、建築家は浅石優さんでした。浅石さんは東京都多摩動物園昆虫生態園も設計され、温室設計に非常に優れている方です。やはり特徴は太陽光を十分入れていること。ただ、太陽光があたるとガラスにコケが生えるため掃除をしなければならず、館を運営する側にとっては非常に手間がかかります。しかし、陸上植物や海藻が繁る環境を作る場合は、人工光よりかなり得をします。

上山 本来の自然の姿により近づく。魚にもいい。

安部 水辺の環境を作るうえで、非常にプラスです。大部分の魚にとってはそうですが、深海にいる魚は苦手ですね。

地域の強い思いが実現し

水族館がオープン

上山 ところで、アクアマリンが地域の文化施設として果たす役割はどういうものですか。

安部 福島県は日本で2番目に大きな県で、東西南北に幅も厚

アクアマリンふくしま(財団法人ふくしま海洋科学館)

全館をガラスでおおった自然光のふりそく明るい水族館。黒潮と親潮の出会い「潮目の海」を中心に4つのフロアから構成される。おもなコーナーに「海・生命の進化」、「ふくしまの川と沿岸」などがある。

■場所・アクセス

福島県いわき市小名浜字辰巳町50

常磐自動車道いわき湯本ICから約20分、JR常磐線泉駅からシャトルバス(日祝のみ有料)で約15分

■開館時間

3/21~11/30 9:00~17:30

12/1~3/20 9:00~17:00

(入館は開館の1時間前まで)

■休館日 毎週火曜日(その日が祝日または振替休日の場合は翌日)

■入館料

一般/1,600円(1,300円)

小・高校生/800円(650円)

(1)内は20名以上の団体の場合

■URL

<http://www.marine.fks.ed.jp>



みもあります。県内は会津・中通り・浜通りの3地方に大別され、そのなかの浜通りに設置してほしいとの願望が20数年あったようです。

途中、バブル崩壊などがありましたが、2000年にオープンすることができた。これは地域の願望の強さの表れだと思います。小名浜港の棧橋に位置し、いまま活動している漁港、産業の真っ只中にできた。ある人は「はきだめに降りた鶴」と言っていました。オープン以降大きな追加投資はありませんが、周囲の道路や港の整備が進み、きれいになっています。

上山 家族連れや子供たちなどいろいろな市民が来ることで「見られる」という緊張感が地域に生まれているのかもしれないね。

安部 そうですね。

上山 歩いて数分のところに物産館や遊覧船がありますが、水族館との相乗効果はありますか。

安部 当館の運営は県の財団ですが、館自体はいわき市にあります。やはり観光客の集客力を強めようという気持ちは県も市も同じだったようです。1号ふ頭には、いわき市観光物産館(愛称ら・ら・ミュウ)が1997年にオープンし、集客の実績があった。そして2号ふ頭にアクアマリンがオープンした。ふ頭の間は400mほど離れており、ウォーターフロントの再開発のあり方としてはまだ途上にあります。古びた倉庫などがあり、街の中心部と港を隔てている。人を集めるという意味では、ハード的にも開発途上にはありますが、逆の意味で可能性があるといます。

上山 倉庫などは現代美術に使えますね。アメリカ・バージニア州のアレクサンドリア市はワシントンの少し南にありますが、そこでは昔の魚雷工場を改造して現代美術の工房にしています。近くに公園やシーフードレストランがある。さらに水族館があれば、集客力はさらに上がると思います。小名浜も今後の可能性が考えられますね。

安部 そうです。ボストン港もホルチモア港も海運業がさびれて、人が集まる集客施設として水族館を選んでいる。文化財というより、人間の活動でさびれたものにアーティストがひきつけられるといった共通する面も見られます。

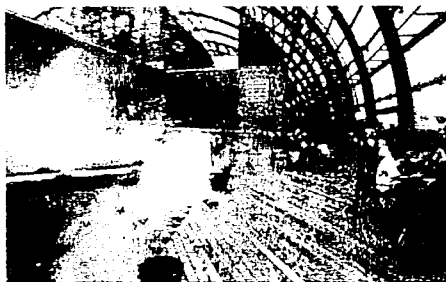
上山 小名浜港は、中国向け輸出入の拠点だし、漁業も盛んで



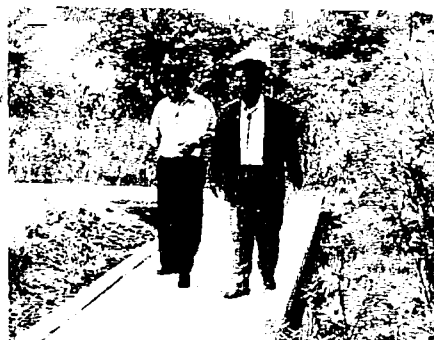
上山 健一 (うえだ けんいち)

慶応義塾大学教授 (大学院政策・メディア研究科)、大阪市立大学教授 (大学院都市研究科) を兼任。専門は企業、行政機関、NPO の経営戦略と業績評価。近年は都市再生、地域再生、ミュージアムマネジメント分野も手がける。選書編、マッキンゼー (共同編著者)、米田ジョージタウン大学研究教授を経て現職。京都大学法学部、プリンストン大学大学院 (公共経営学博士) 修士卒。行政経営フォーラム代表。

主な著書に「ミュージアムが都市を再生する」(共著、日本経済新聞社)、「行政の経営改革」(第一法規)、「行政評価の時代」(NTT出版)、「政府進歩の時代—地域、自治体、NPOのパートナーシップ」(日本評論社) などがある。Email: ueyama@om-forum.org



ビオトープには時間がくると魚が出てくる



■水辺の環境を復元したビオトープ

アクアマリンふくしまでは、身近な水辺環境についてその価値を再認識し、子どもたちに自然を体験する力を身につけてほしいとの願いをこめ、2003年から水辺のビオトープ作りに取り組んでいる。田んぼや小川、池などもある聖山の水辺に再現し、ドジョウコやフナジコが泳ぎ、カエルたちが合唱する環境作りを目指している。ビオトープの愛称はBioとカエルの鳴き声をもじって「BIO BIO BIO」、別名「かっぱの里」とも呼ばれる。かっぱとは水辺で遊ぶ子どもたちのことである。毎週日曜日には学芸員や館長によるビオトープが行われている。

すね。街に活気があるうちに、次のステージに向けた投資が行われている。その意味では先見の明をもっている。

安部 そう。決して景気がよいわけではない。とくに漁民の高齢化などで漁業の衰退は目を覆いたくなる状況ですが、沿岸漁業はまだ健在で、物流量は右上がりに増えています。人間の活動と環境を考えると、立地としてはかなり恵まれている。

自然と共存する教育のあり方

上山 さて、建築について少しお伺いしたい。これまで水族館といえば、水槽があって、それをのぞくというイメージだったのですが、アクアマリンは太陽光がふり注いで、植物もずいぶんある。外を眺めるとガラス越しに船や倉庫、工場が見える。これは珍しいですね。

安部 ガラス越しに見る展示については、背景も含めて環境を再現する展示を目指してきました。そのあたりの完成度を高めたうえで環境教育に、と思っていた。つまり、展示レベルが低くは環境教育にならないだろうと思っていた。そういう意味でオープン以来、それぞれの水槽のテーマの展示や植物環境はよくなっています。

上山 それは、進化する水族館とでもいえるものですね。さきほどビオトープ (→P20コラム) に行きましたが、あれは年々様子が変化していくものですね。小学1年の子どもが6年生になるまで毎年来てそのたびに驚くなどいろいろな楽しみがあるかもしれない。

安部 展示があって教育普及活動があるんでしょすが、学校教育とは違って、環境教育とか保全教育という言葉があるように、自然と共存する教育のあり方に多少問題意識があります。環境教育においては最近、ただ自然の理解度を高める、自然に親しむだけでは足りないのではないかと考えています。それは都会に限らず、地方でも自然と人間の距離が離れてしまった。川の3面張りや港湾部のかみそり護岸など、要するに距離ができてしまったのです。

上山 そうですね。川や海は危ないから行くなという親もいる。

安部 そうなのです。科学的な根拠はありませんが、自然から断絶された子どもたちがそれに代わる欲求として、異常な行動をとっているのではないかと感じたりもします。単にきれいな

展示を見て勉強するというだけでなく、より意味のある内容にしていけないといけない。たとえば、ビオトープでとれるものを食べる、殺してみるなど…。われわれがほかの命を頂戴して生きているということを実感できる教育ができればいいと思う。

上山 水族館という名前を超えた存在になるかもしれないね。

ボランティアはパートナー “チューター” も活躍

安部 日本には多くの水族館、動物園がありますが、もう少し存在感を高めなければならないと思います。

上山 展示で何かを教え込むというより、自分で自然に触れて感じるのを助けるという感じですか。自ら学ぶというか…。

安部 そう、体験です。そのお手伝いをする形です。

上山 年齢層的には、何歳ぐらいの子どもが対象ですか。

安部 保育園児や幼稚園児、3歳ぐらいからの自然体験が保障できればいいなど。

上山 実施するにはお世話する人が必要になってきますが、ボランティアの方々の活動はどうですか。

安部 活発なボランティア活動を特徴のひとつにしようと、行政もかなり関心をもっていました。いまのボランティアはイコールパートナーということでサポートしています。月に少なくとも2回来てもらうことが条件です。オープン前から登録して、現在は180名ほどで1日20名ほどの人が活動しています。貢献時間何千時間という表彰もしていますが。

ただ、必ずしも月2回できない人がいて、それをなんとかしようとチューター (→P21コラム) というものをつくりました。これは館側がお願いをして来ってもらうボランティアで、日常活動ではありません。たとえば親子釣りスクールをやる場合、登録している釣りにくわしい方に来てもらう。ボランティアとの掛け持ちも可能で、現在20名ほどが登録しています。

上山 これは他館にはない制度ではありませんか。

安部 あまりないと思います。仕事があって月2回もできないという方が登録しています。チューターの場合、館側からのお願いで来てもらい、ほとんど無償です。現在は館外での活動が多いですね。

■知識と経験を活かすチューター

ボランティア制度のひとつである「チューター登録制度」は、昨年の10月からスタートし、現在約20名が登録している。

チューターのおもな活動内容は、アクアマリンふくしまが主催する各種スクールの講師や補助を務める「体験学習活動チューター」、生物調査における情報提供と調査活動の支援を行う「生物調査活動チューター」、移動水族館、館外学習において実施する各種活動の講師や補助を務める「館外学習活動チューター」である。

個人がもつ知識や経験が大いに活用できる場となっている。ボランティアとの掛け持ちも可能である。

■「あぶくま発見の旅サポート」

いわき地区にある8つの文化施設が利用者の利便性の確保や連携、協力体制の構築と共同事業の推進のため設立した「いわき地区文化施設連絡会」を前身としている。

これまで連絡会では各施設共通のリーフレット等を作成し広報に活用していくほか、学芸員の共同研修を実施し職員の資質向上をめざすことなどが話し合われてきた。そして昨年7月、連絡会はこれらの内容を「あぶくま発見の旅サポート」共同宣言として採択。会の名称を「あぶくま発見の旅サポート」と改めた。



安部 健孝(あべ・よしたか)

アクアマリンふくしま(ふくしま海洋科学館)館長(専務理事)。東京郵政西園海水族館館長、東京都環境上野動物園館長などを経て現職。東京水産大学海洋学専攻、1940年生まれ。福島県がアクアマリンふくしまの基本構想、基本計画を策定した平成4年度から現在まで建設、整備及び開館後の運営のあり方等の検討にあたり委員として参画してきた。専門は魚類学。

上山 アメリカの軍隊にもリザーブという制度があります。半分リタイヤしていたり、ほかに仕事をもっている人がやっていますが似ていますね。ボランティアの方の作業内容はこういったものですか。

安部 徐々に充実していますが、当初は顕微鏡を動かすときの手伝い、海洋文化の参加型展示の手伝い、タッチプールの解説などスポットが限られていました。しかし、最近はシケーダガイドといって、シケーダとはセミですが、ミンミンゼミがあちらこちらにいて鳴くのと同じように、館内のあちらこちらを回ってガイドすることをスタートしました。

上山 自由にあちらこちらを回って声をかける。

安部 そうです。あとバックヤードツアーは館が決めた時間だけでなく、お客さまの都合に合わせた時間帯でも行います。去年の秋からスタートして、もう数万人のお客さまが利用しました。

上山 そのツアーでお客さまは何に興味をもちますか。

安部 一種の楽屋裏ですから。表のきれいな展示とは違って、なかなか想像できないし、こんなにも大変なんだと思ってくれる。建物の7割は環境を維持するための設備で占められ、展示は3割ですから。

金魚の常設展示スタート

上山 7月から金魚の展示を始められました。これは盲点だったというか、よその水族館ではなかなか見られないテーマで、ユニークですね。

安部 ありがとうございます。金魚は1000年前に中国から伝来して、もともとは中国のフナから作られた品種です。そのフナは日本にもいます。現在、日本には30種類ぐらいの品種がありますが、中国の金魚とはだいぶ様子が違いますので、それらを対比させて常設展示がスタートしました。

上山 日中文化の比較学のような感じですか。

安部 そうですね。中国庭園と日本庭園の比較などでもできる。

上山 日本人はそういう点をもっと勉強するべきですね。ちなみにバラオの展示もありますが、昔からおつき合いがあるのですか。

安部 私が東京都にいたころ、国際協力事業団の事業の一環

でバラオに研究所と小さな水族館を附属させた施設を作る委員会のメンバーでした。それが2001年にオープンし、昨年3月にその事業の進捗状況をチェックするためにバラオに行っています。

アクアマリンのテーマは“潮目の海”で、黒潮と親潮がいわきの沖合いで混ざり合い、いい漁場になっていますが、その黒潮の源流がバラオの近海なのです。北赤道海流がバラオ付近から、フィリピンに沿って黒潮になって北上する。それで源流の海というテーマで企画展が始まりました。第二次世界大戦の玉碎の地でもあります。当時からサンゴ礁の研究施設やいろいろな歴史もありますので、それをテーマに来年5月まで行います。

上山 ほかに海外の水族館との連携はどういうものがありますか。

安部 金魚では香港のオーシャンパークと、オープン時にアメリカのモントレイ湾水族館と提携しました。

上山 提携とはどのような内容ですか。

安部 おもに飼育職員の交流と研修です。

上山 日本の水族館は海外との交流は盛んなほうですか。

安部 かなり没交渉でやってきたようです。技術水準は決して低くないので、我流でやってきた。水族館はヨーロッパでは動物園の園内施設として発達したわけで、日本とは少し事情が違います。上野動物園のように園内に水族館がある場合もありますが、大部分は独立した施設でしかも半数は民間施設という形態です。こうした日本独特の状況もあって没交渉でやってきたわけですね。

上山 海外との比較では美術館などほかの文化施設でも同じ傾向があります。しかし、水族館はほかの施設に比べるとより多くの人々に愛され、入場料も安くないのに多くの来館者があって民間でも成り立ってきた。これはなぜですか。日本人は魚を食べたり、親しんでいる。海が近くにあり施設の維持管理がやりやすいなどいろいろな要素があると思うのですが。

安部 そうですね。島国で海岸線が長く、海の自然に接する人口が多い、つい最近まで水産立国という時代があり、今日でこそ水産業は衰退していますが、日本人の魚好きは変わらない。

上山 技術のバックアップもありますね。

安部 そう、バルブ、ポンプ、ガラスなどです。



日本、中国の約30品種200もの金魚が展示されている。8月には「アクアマリンと金魚の夏」と題し9日間夜間開館し、金魚すくいや金魚の飼育相談会が行われ好評だった。苫田臨海水族園とパラオ国際サンゴ礁センターとは提携関係にあるが、この展示を期に香港のオーシャンパークとアメリカのモントレー湾水族館とも提携した

コストの安い魚を研究 サンマやアオメエソを展示

上山 美術館関係者と話すとき必ず話題になるのが、コレクションがないという問題です。美術品はヨーロッパの主要国、せいぜいアメリカまでです。日本にもそれなりの蓄積はありますが、西洋美術となるといまさら追いつけない。しかし、動植物の場合は繁殖ができる。そういう意味で、生き物系の文化施設は日本人に向いているように思います。

安部 バンダ級のカリスマ性のある動物で集客するのが常套手段ですが、海の生物のなかにもクラゲやクリオネのような小さくてもおもしろい動物があります。魚は2万5,000種類以上あり、深海魚などスターに仕立てる魚の素材には事欠きません。

上山 まだ発見されていない新種はあるのですか。
安部 たくさんあるはず。人間が査定している生物は150万種類ぐらいで、それ以外にも数千万種類いるといわれています。

上山 深海の生物はどうですか。
安部 ほとんどわかっていません。
上山 新しい生物がでてきて、それが展示企画の対象になっていく。コレクションの開拓という意味ではまだまだ発展性のある分野ですね。

安部 そうです。
上山 一方、なじみのサンマの繁殖もされている。サンマや金魚というのがおもしろい。

安部 ごく普通の種類でも、けっこう研究テーマとして取り組まれている。水産分野では値段の高いものは一生懸命研究しますが、単価の低いものは研究しません。

上山 サンマの飼育は盲点だったのですか。
安部 盲点ですね。サンマはライフサイクルが短く、わずか1年です。卵から親まで完全なケアをしなければいけない。そういうものを常設で展示するのはチャレンジです。

上山 どうしてそうしたテーマを選んだのですか。
安部 ここは小名浜港という非常に栄えた漁港であり、かつてサンマは日本一の水揚げ量でした。現在、水産においては持続的な漁業というのがテーマで、まだまだ研究されていないコストの安い魚があるわけです。

いわき市も漁業の町ですから、水産の衰退にかなり危機感をもっている。そこで市の魚を制定しようということで、いろいろな候補があがりました。しかし、たとえば、サンマは気仙沼市の魚、カツオは高知県の土佐がブランドです。それで何にしようかと、市と消費者、生産者で市の魚選定委員会を開きました。なかなか決まらなかったのですが、最終的にアオメエソになった。住民投票でも安くておいしいアオメエソがダントツのトップでした。カリスマ性のない魚ですが、少しずつメジャーになり、最初はキロいくらしなかったのに現在は1,000円以上です。アオメエソは現在展示されており、いわき市から調査研究費をいただいています。

上山 深海の生物は浅海の生物よりむずかしいですか。
安部 深海は水圧の問題があり、それを水槽内で再現するのはむずかしい。深海の探索は宇宙より大変でお金もかかります。

驚かせるのではなく、考えさせる水族館

上山 入館者の傾向はどのようなものですか。やはり個人が多いのでしょうか。

安部 個人も多いですが、平日でも家族連れは多いです。いままでの統計では、県内の方が4割、隣接県の茨城、宮城、それに秋田や東京も増えています。車で来る方が多いです。

上山 この5年間で来館者のタイプに変化はありますか。
安部 そのあたりのマーケットリサーチは今年から実施する予定です。私はそうは思わないのですが、旅行会社いわく、この地域は観光のスポットとして空白地帯であるといいます。水族館というとイルカやアシカショーがありますが、ここはペンギンもない。そんなことでやっていけるのかと心配してくれる人もいますが、そういうアイドルがいなくても、水族館観賞の目が肥えた層が増えているのは確かです。

上山 ここは展示の入り口が非常にユニークですね。普通は大水槽や大きなマグロが泳いでいますが、入り口は意表をつく演出だと思います。
安部 生物進化を導入しました。これは欧米の人に聞くと、やりたくてもできないテーマだと言います。キリスト教の国では、ヒトが人間以外の動物から発生したとは信じがたいことで、子どもたちにも教えられない。



1階にあるミュージアムショップ「ウミノス」。「海」の「魚」という発想からネーミングされた。ショップの一角にはサンマのグッズコーナーがあり、サンマのボールペン、ストラップなどが販売されている



安部館長自らが描いた絵をもとにデザインされた魚のネクタイ。その絵をもとにしたぬりえ



レストラン「アクアクロス」。ガラス張りで天井が高く広々とした明るい店内

上山 アメリカでもそうです。進化論の授業には子どもを欠席させる親がいる。

安部 進化を導入している水族館はあまりない。

上山 教育的要素が入っていて、驚かせるというよりは考えさせる水族館ですね。

安部 そのシナリオはよいと思う。それは大事にして、足りない部分を活かしていけばよいのかなと思います。

上山 日本の文化施設の場合、初年度にどっと人が来て、2、3年目は少し入館者が減り、それから安定期に入って次のステージに移るパターンが多い。アクアマリンも5年目となると次のステージが見えてくるのでは。

安部 そう、水族館は民間が多いし、大規模な企画展示を行うなど追加投資が必要ですね。

上山 ここは敷地的には拡張余地が限られますね。

安部 参加体験型の機能はありますが、少し不足している部分もあるので、館の外にビオトープを作ろうと思っています。昔、子どもたちが遊んだ里山をつくり、その延長線上には大きな干潟などの計画があります。

上山 最終的には海ともつながり、何かが生まれるかもしれませんね。体験の内容を深めるような施設の変化、敷地の外に対する発展なども考えられる。

安部 そう、自然の海岸もあり、阿武隈山地もある。そうした場所の活用もできるでしょうね。

上山 ボランティアの人が子どもを連れて海に行く。そういう発展性はありますね。

安部 夏休みに宿泊して海や山を体験するなどとは可能だと思います。

“顔が見える”経営がとても重要

上山 先ほど入館者数の話ができました。いま、日本各地の公立ミュージアムは行政改革で予算が割られ、同時に入館者数をとにかく増やせと言われてる。でも、私はそれはおかしいと思う。まったく来ないのは問題外ですが、来館者数が多ければいいというものではない。全国の文化施設が躍起になっている入館者数目標の追求についてはどうお考えですか。

安部 経営は非常に大事です。組織の一人ひとりが自己実現し

ながら長くやっていくためには経営がベースにないといけない。しかし、行政側がいまになってそう言ったとしても、公共施設の配置段階から長くもつような施設をめざしたわけではない。政治の都合などがあって、使いにくい施設になっている。それで人を集めるというのはむずかしいことです。

上山 立地も問題ですね。欧米では文化施設は、たいてい街の中心部にあります。

安部 そういうことも含めて、戦略・戦術がない。経営は大事だと思う。そこに貼ってある「いわきの過去、現在、未来への旅」というポスターは、既存の公共施設の連絡協議会です。お客さまをどう呼ぶかをテーマに話し合いをしています。「あぶくま発見の旅サポート」(→P21コラム)という事業名にしていますが、選択肢を好みに応じて提案するなど、やり方はいろいろあると思います。この事業は一昨年スタートしました。

上山 文化施設の経営には、単に展示集客だけでなく地域経済効果なども見据えた戦略が必要です。ところが一定以上の段階に入ると行政の縦割りの理屈でこれが見えなくなる。

安部 ここでは全体のシナリオに合わせて生き物を集めて展示していますが、なかには一般受けしない場合もある。そういう場合はこちらを優先的に展示しなさいというケースもあって、企画展示のテーマを決めるときはリーダーシップが必要です。

上山 よく非常勤の館長や、場合によっては館長がいないところもありますが、ミュージアムの場合かなりむずかしいですね。

安部 どんな分野であれ、熱意と素質があればいいですが、天下りなどはどうも。2、3年で異動したり、顔が見えない施設というのはまずい。顔で交流しているところがありますから。

上山 文化施設はみんなそう、特に海外はそうですね。でも顔が見える経営は行政の論理に合わない。

安部 後継者を育てる仕組みも必要です。

上山 あとはいろいろな施設を渡り歩くことでしょうか。館長の場合は、東京都におられて、いろいろな施設を経験され、葛西水族館の新規の立ち上げにも関わられ、プロの腕を磨かれたという意味では大変ラッキーな経験でしたね。

安部 そうです。運にも恵まれないといけませんね。

—ありがとうございました。
04.08 ふくしま海洋科学館(アクアマリンふくしま)にて

(まとめ・編集部)
<撮影>米良勝巳